

Faux Amis または False Friends について

武本 雅嗣 (本学部准教授)

I はじめに

人類史上、1つの言語がこれほど広い範囲で、しかもこれほど多くの人々によって使われるようになったことはなかった。その国際通用言語はもちろん英語である。英語の影響力は極めて大きく、今日世界中の多くの言語の中に、その語彙が多かれ少なかれそのままの形で、あるいは別の文字形態に変換されて流入している。しかしながら、その英語にしても、過去には他の言語の非常に大きな影響を受けたことがあった。その痕跡は文法にも少しみられるが、とくに語彙の面にはっきり残っている。大槻 (2007: 57) によると、英語のもっともよく使用される1万語の語源的内訳は、英語本来語が31.8%、フランス語が45%、ラテン語が16.7%、古ノルド語が4.2%、その他の言語が2.3%とされている。英語本来の語彙よりも外来の語彙のほうが多いわけであるが、なかでもフランス語から流入した語彙の占める割合が突出している。そのため、まったくフランス語を知らなくても、英語からその意味が類推できることもよくある¹⁾。以下同様に、代表的な意味を付けて、左側に英語、右側にフランス語を示していく。

accident 「事故」 — accident 「事故」
 village 「村」 — village 「村」
 marriage 「結婚」 — mariage 「結婚」
 season 「季節」 — saison 「季節」

また、フランス語はラテン語の口語である俗ラテン語を基盤としてできあがったうえ、さらにラテン語から語彙を少なからず採り入れているが、英語もラテン語から多くの語彙を借用したため、結果的に、まったく同じか類似した形態をしていて意味もほぼ同じである語彙もみられる。次のペアの英語はフランス語経由ではなく、ラテン語からの直接借用とみなされている。

type 「タイプ、型」 — type 「タイプ、型」
 situation 「情勢、状況」 — situation 「情勢、状況」
 system 「制度、体系、方式」
 — système 「制度、体系、方式」
 fact 「事実」 — fait 「事実」

一方、綴りが同じかよく似ているにもかかわらず、意味が異なっている場合も非常に多い。

lecture 「講義、講演」 — lecture 「読書、読み物」
 library 「図書館、蔵書」 — librairie 「書店、出版社」
 travel 「旅行」 ; travail 「〔正式〕 労苦」 — travail 「仕事」
 foreign 「外国の、〔正式〕 異質の」
 — forain 「市の、旅の、流れ者の」

同語源で同形態か類似形態でありながら意味が異なるこのような一対の語彙は、フランス語では faux amis (偽の友達) と呼ばれている。英語にすると false friends である (false cognates と呼ばれる)。厳密に言えば、完全に同じ意味のまま語彙が借用されることはむしろ稀であるし、長い年月を経れば語の用法や意味は変化していくものである。

このように、faux amis は、借用語の用法変化および自然言語の語彙の意味変化を考えるうえで、たいへん興味深い言語現象である。本稿では、とくに英語におけるフランス語からの借用語の意味変化とフランス語における英語に借用された語彙の意味変化に着目して、英語とフランス語の基本語が関係する faux amis の意味論的分析を行うことにする。

II 英語とフランス語の歴史的関係

意味分析に先立って、まず、なぜ英語とフランス語の間にこれほど多くの faux amis が存在するのかを説明しておく。

インド・ヨーロッパ祖語に起源があるとされるインド・ヨーロッパ語族の言語は、インド・イラン語派、イタリック語派、ケルト語派、ゲルマン語派、スラブ語派等の語派に下位分類される。現在のヨーロッパ諸国の主要な言語のうち、英語・ドイツ語・オランダ語・デンマーク語などはゲルマン語派、フランス語・イタリア語・スペイン語・ルーマニア語などはイタリック語派、ロシア語・ポーランド語・チェコ語・ブルガリア語などはスラブ語派に属している。簡略ではあるがわかりやすいので、下に『世界言語文化大図鑑』（コムリー：40）より系統図を引用する。

言語間関係をわかりやすく言えば、同じ語派の諸言語は兄弟の関係にあり、異なる語派の諸言語はいとこの関係にあるということになる。したがって当然、異なる語派に属する2つの言語よりも、同じ語派に属する2つの言語の間に、文法的にも語彙的にも多くの共通点が認められる。しかしながら、ゲルマン語派の言語とイタリック語派の言語は、それらの言語集団の間で強い接触があったため、様々な面で比較的似通っている²⁾。なかでも英語とフランス語には、語派が異なるにもかかわらず非常に多くの同形態や類似形態の語彙があるわけであるが、その主要な要因は2つある。1つは、先ほど述べたとおり、それぞれがラテン語から共通する語彙を採り入れたから。もう1つは、より重大な要因であるが、1066年のノルマン人のイギリス征服後、1362年までの約300年間フランス語がイギリスの公用語になったことによって、大量のフランス語の語彙が英語の中に入り込んだからである。現在のフランスのノルマンディー地方のあたりを領土としていたノルマン人たちの言語はノルマン方言すなわちノルマン・フランス語であったが、そこからあるいはそれを基盤としてイギリスで使われるようになったアン

グロ・ノルマン語から、そして大陸の主要な言語になり始めていたパリを中心とするフランシヤンの方言すなわち古フランス語から大量の語彙が流入したわけである³⁾。

借用語と元の語は今でも見た目が似ている場合が多いが、なかには、年月を経て同語源とは気づかれないほど綴りが違っているペアもある。以下の英語とフランス語はすべてほとんど同義である。

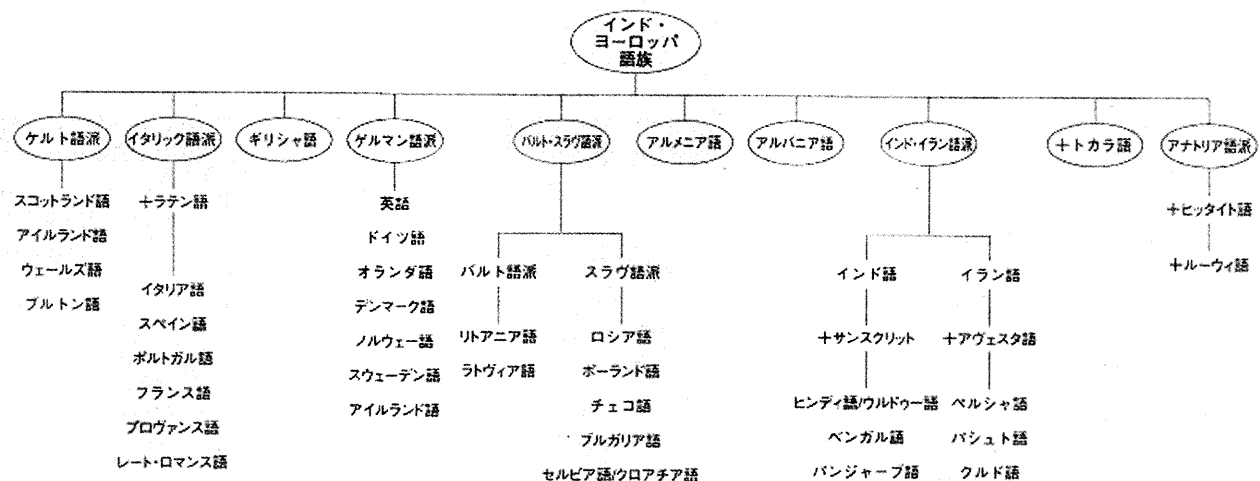
- castle 「城」 — château 「城」
- avoid 「避ける」 — éviter 「避ける」
- war 「戦争」 — guerre 「戦争」
- story 「物語」 — histoire 「物語、歴史」⁴⁾

比較言語学の観点からみれば、いずれも音韻・形態変化の法則に則ったものであるのだが、形だけでなくさらに中身まで大きく違っていてしまうと、英語がかつてのフランス語やノルマン・フランス語からの借用語だとはなお気づかれにくい。

- catch 「つかまえる、つかむ」
— chasser 「狩る、追い払う」
- wait 「待つ」 — guetter 「待ち伏せする、待ちかまえる、待ちわびる」
- scout 「偵察する、捜し出す」
— écouter 「聞く、耳を傾ける」
- very 「非常に」 — vrai 「本当の」

Ⅲ 英語の基本語に及ぼしたフランス語の影響

英語史研究においては、本来語と借用語の割合に関する詳細な統計調査が行われている。右に引用する



Williams(1975: 67)の表は、使用頻度の高いほうから順に、1000語ずつの語彙群に占める本来語と借用語の比率を示したものである。

Decile	English	French	Latin	Danish	Other
1	83%	11%	2%	2%	2%
2	34	46	11	2	7
3	29	46	14	1	10
4	27	45	17	1	10
5	27	47	17	1	8
6	27	42	19	2	10
7	23	45	17	2	13
8	26	41	18	2	13
9	25	41	17	2	15
10	25	42	18	1	14

これを見てまず目につくのは、Decileの1つまりもっともよく用いられる最初の1000語とDecileの2つまりそれに次ぐ1000語の間の言語別占有率の大きな差である。このデータは、もっともよく用いられる基本語は英語本来の語彙で占められていて、他の言語の語彙にあまり取って代られなかったということを示している。フランス語ですらそこにはそれほど入り込んでいないわけであるが、また、ラテン語の比率の低さからは、日常生活で頻繁に用いられるような卑近な語彙はラテン語からほとんど借用されなかったということも読み取れる。

さらに、基本語についてももう少し詳しくみれば、個別言語の根幹をなすような人称代名詞や繫合動詞はもちろん、使用頻度が極めて高い機能語もほとんど影響を受けていないことがわかる。冠詞、代名詞類はすべて英語本来の語彙であり、前置詞や接続詞にしても、わずかに次のものが挙げられる程度で、ほとんど他の言語の影響はみられない。

across during pending because

当初副詞的に使われていて16世紀の終わりごろから前置詞としても用いられるようになったacrossはアングロ・ノルマン語のan cros “on cross”の縮まったものであり、接続詞becauseも古英語bi+古フランス語cause “by cause”の結合形である。また、前置詞during、pendingはそれぞれ、現在分詞から前置詞になったフランス語のdurant「…の間中」、pendant「…の間」に倣った造語である。つまり、これらは単語レベルの純粋な借用語ではないし、前置詞や接辞と内

容語との合成語が機能語に転じたもので、いわば非典型の機能語なのである⁵⁾。それに対して、もっと使用頻度の高い前置詞at、in、on、to、ofや接続詞and、butなどは形態素分解ができない典型的な機能語であり、これらはすべて英語本来の語彙である。

また、内容語であっても、「存在・所有」、「往来」、「好み・望み」を表すもっともよく用いられる基本動詞も、さらに遡れば起源が同じものがあるとしても、古フランス語からの借用ではなく、英語本来の語彙である。

be—être have—avoir go—aller
come—venir like—aimer want—vouloir

これらに準じる動詞、たとえばstayやpossessやarriveやadoreはフランス語からの借用語であるが、最重要語であるstayとarriveについては後ほど説明を加える。

IV 英仏語faux amisの特徴

今、主として英語の語彙史研究の立場から、フランス語が英語に及ぼした影響について観察したわけであるが、英語とフランス語の間のfaux amis研究においては、次の点にも留意する必要がある。つまり、英語の基本語になったフランス語の数が少ないということは、英語に流入したフランス語の基本語の数が同じだけ少なかったということの意味するわけではないということである。フランス語の基本語は英語の基本語にそれほど取って代らなかつたけれど、用法・意味が変化して残っているものがかなりあると感じられる。そのことを確かめるために、仏和辞典で最重要語とされる語彙のどれくらいが英語の中に入り込んでいるかを調べたところ、次のような結果が得られた⁶⁾。

- ① 仏和辞典の最重要語（アステリスク2つ）993語の約42%（機能語を除くと約47%）が英語に流入しているが、英語ではそのうちの約30%が最重要語（アステリスク2つ）、約35%が重要語（アステリスク1つ）、約35%がそれ以外（アステリスクなし）になっている。

要するに、フランス語の最重要語の4割強が英語に入り込んでいるものの、英語ではその7割がより重要度の低い語彙として残っているということである。これは、我々の印象を裏付ける割合と言える。つまり、機

能語を除くとフランス語の基本語の半数近くが英語に入っているが、元のフランス語の中心的な意味ではなく派生的な意味をもって英語として定着し、結果的に使用頻度が比較的低くなっているものが非常に多いということである。

また、英語の語彙史研究においては本質的な問題ではないが、faux amis研究では、英語の基本語になった古いフランス語が果たして現在基本語なのかどうかという点にも注目しなければならない。そこで、英和辞典で最重要語とされる1020語のうちのフランス語系の借用語299語に対応する現在のフランス語の語彙の重要度を調べたところ、次のようなことが判明した。

- ② 英和辞典で最重要語（アステリスク2つ）とされるフランス語からの借用語299語に対応するフランス語は、約48%が最重要語（アステリスク2つ）、約40%が重要語（アステリスク1つ）、約12%がそれ以外（アステリスクなし）になっている。

意外にも、フランス語からの借用語の5割強が英語において重要度が高くなっている。このことは、何百年も経て、英語において使用頻度が高い意味をもつようになったり、あるいはフランス語において使用頻度が低い意味に変わったり使われなくなった事例が少数派ではないということを示している。ただし、英語のほうが最重要語でフランス語のほうが重要語でもないfaux amisの数は、英語のほうが重要語でもなくてフランス語のほうが最重要語であるfaux amisの3分の1ほどで、わずか38例であった。つまり、英語において使用頻度が極端に上がったり、フランス語において使用頻度が極端に下がっている事例はやはり稀なfaux amisだと言える。

V 基本語の英仏語faux amis

faux amisの意味のずれは言語内的要因と言語外的要因によるが、語彙史研究では、実証主義に徹している場合が多く、なぜそのような意味に変わるのかという点についてはあまり触れられない。語彙の用法拡張や意味変化には、多くの場合、メタファーやメトニミーやシネドキなど人間の様々な認知の営みがかかわっている。この点を重視して、基本語に関するfaux amisを3つの場合、すなわち、1 英語もフランス語も最重要語である場合、2 フランス語だけが最重要

語である場合、3 英語だけが最重要語である場合に分けて具体例を示し、意味論的分析を行っていく。

1 英語もフランス語も最重要語である場合

まずは、いずれの言語でも最重要語とされているペアである。次のような場合は、微妙な用法の違いはあるとしても意味的差異が小さいため、faux amisとしては必ずしも典型的なものではない。

question「質問」—question「質問」
simple「単純な、簡素な」—simple「単純な、簡素な」
receive「受ける」—recevoir「受ける」
cost「かかる、値段である」
—côûter「かかる、値段である」

しかしながら、このタイプには、明らかに意味が異なるペアも含まれている。次のような例は、両方とも日常的に極めてよく用いられるだけに、初学者にはとくに重要なfaux amisであろう。

arrive「着く」—arriver「着く、起こる」
front「正面、前面、〔詩〕額」—front「額、正面、前面」
travel「旅行する」—travailler「働く、勉強する」
magazine「雑誌、倉庫」
—magasin「店、倉庫」； magazine「雑誌」

英語のarriveは比喩的用法による意味はもっていないが、「着く」という基本的な意味では用いられるため、フランス語のarriverほどではないものの、やはり使用頻度の高い動詞である。travel「旅行する」—travailler「働く、勉強する」の場合は、英語において「苦勞する」から、昔長距離移動は苦勞を伴うものであったため、「旅をする」という意味になってかなり違っているが、いずれも日常よく用いられる語彙である。また、両方とも最重要語であるmagazine「雑誌、倉庫」—magasin「店、倉庫」の場合は、いずれも原義よりも派生的な意味のほうが重要な意味になっている。英語では、「倉庫」の意味ではあまり使わなくなって、換喩的用法の「軍用倉庫のリスト」との類似性からか、あるいは「情報の宝庫」に見立てた比喩的用法からか、「雑誌」の意味で日常的に用いられるようになった。一方、フランス語では、「物が保管されているところ」という類似性に基づいて「店」という意味で日常生活で用いられるようになったわけである。

そして、フランス語のmagazineは18世紀に英語から借用された語であり、外見の変化はわずかだが中身がすっかり変わった、いわば逆輸入語なのである。

なお、古いフランス語からの借用語に生じた意味が元のフランス語に加わっている場合もある。

suit「スーツ」；suite「(ホテルの) スイート」
—suite「続き、結果、(ホテルの) スイート」

英語のsuiteと最重要語suitはフランス語の最重要語suiteからの二重語であるが、フランス語のsuiteに本来なかった「(ホテルの) スイート」の意味は20世紀に英語のsuiteからもたらされた新しい意味である。この場合は、形がまったく同じであるため、中身の意味のみ採り入れたわけである⁷⁾。

2 フランス語だけが最重要語である場合

このタイプのfaux amisがもっとも多い。ほとんどの場合、フランス語から流入した語彙が同じような意味を表す英語の基本語に取って代らず、英語において限定的に用いられ、比喩的な意味で使われるようになっていく。

まず、英語のほうで意味が特化されている事例を示す。

voyage「航海、船旅、空の旅」—voyage「旅行」
argent「〔詩〕 銀色 (の)」—argent「お金、銀」
dent「(歯車・くしなどの) 歯」
—dent「歯、鋸歯状のもの」
bruit「〔古〕 噂」—bruit「物音、騒音、噂」
arrest「逮捕する、〔正式〕 … (の進行) を止める」
—arrêter「止める、やめる、逮捕する」
march「行進する」—marcher「歩く」
chant「詠唱する、シュプレヒコールする」
—chanter「歌う」

借用語が比喩的用法によって抽象的な意味を持つようになっていく場合は通常使用頻度は高くないが、また、正式な場でのみ用いられるようになっていく場合も重要度は低くなる。

quit「やめる、〔略式古〕 去る」
—quitter「離れる、去る、別れる、やめる」
regard「みなす、〔正式〕 (ある眼差し・態度で) 見る」
—regarder「見る、みなす」

profound「〔正式〕、〔比喩的〕 深い」—profond「深い」
malady「〔正式〕 (社会の) 病弊、〔古〕 (特に慢性的な) 病気」—maladie「病気、病弊、病癖」
commence「〔正式〕 開始する、始まる」
—commencer「始める、始まる」

次に挙げるのは、英語において、同じ理由で原義では用いられず、類似性に基づいた隠喩や隣接性に基づいた換喩によって意味が変化している事例である。

foil「(料理用の) ホイル」—feuille「葉」
vent「通気孔」—vent「風」
regard「敬意、配慮」；reward「報酬」
—regard「視線、目つき」

最後の英語の2重語の名詞は初出が動詞よりも先のものであるが、古フランス語から入ったregardは「目配り」からそれに先立つ「敬意」へ、古ノルマン・フランス語から入ったrewardは「観察」からそれに続く「報酬」へと、それぞれ概念的隣接性によって原義から変化した意味を持っているのである。

また、稀な事例であるが、フランス語のほうで意味が変化して日常よく用いられる語になっている場合もある。

viand「〔正式〕 食品、〔古〕 (上等な) 食物」
—viande「肉」
legume「マメ科植物」—légume「野菜」

英語のviandとlegumeは原義を保持していて、使用頻度は低い。一方、フランス語のviandeとlegumeは意味が変化して最重要語になっている。これは、提喩的用法による意味が定着し、ほとんどその意味でのみ用いられるようになったからである。つまり、viandeは際立つ種に特化して使われるようになり、legumeは類に拡大して用いられるようになったのである。

3 英語だけが最重要語である場合

このタイプのfaux amisは比較的珍しい。フランス語のほうで次第に用いられなくなったものもあるが、ほとんどの場合、英語のほうで意味が変化して日常的によく用いられるようになっていく。そこには、様々な用法拡張が関与している。

pen 「ペン、文筆」—penne 「(鳥の翼や尾の) 長い羽毛」
pencil 「鉛筆、鉛筆形のもの、〔稀〕画法、〔古〕画筆」
—pinceau 「筆、絵筆、タッチ」

英語のpenは、羽が筆記のために使われて筆記具を表すようになったため、本来の意味が消失してももっともよく用いられる名詞の一つになっている。なお、フランス語では、同様の意味拡張はpenneではなくplume 「羽、ペン」で起こったが、英語のpenとは違って本義も残っている⁸⁾。

次は、概念的な類似性に基づいた意味の一般化や意味の特化が起こって基本語となった事例である。

candy 「キャンディー、氷砂糖」—candi 「氷砂糖」
carry 「運ぶ」—charrier 「(荷車などで) 運搬する、
(川や風などが) 運ぶ」

また、換喩(メトニミー)による意味変化によって借用語が最重要語になっている場合もある。

mail 「郵便、メール」—malle 「大型トランク、旅行用
大鞆、〔古〕郵便馬車」

フランス語のmalleはかつて、「大型鞆」から隠喩かもしくは換喩によって、「郵便馬車」にまで使用が広がりながら「郵便」には至らなかったが、英語のmailは、換喩的用法によって、容器である「大型鞆」で中身の「郵便」を指すようになったわけである。また、意味のずれが時間的隣接性あるいは事態間隣接性に基づいていることもある。このような場合もメトニミーが働いていると考えられる。

hurt 「傷つける、痛む」
—heurter 「ぶつかる、ぶつける」
catch 「つかまえる、つかむ」; chase 「追いかける、追い払う」
—chasser 「狩る、追い払う」

13世紀初めに古ノルマン・フランス語cachierから借用されたcatchと、13世紀末に大陸中央の古フランス語chacierから借用されたchaseの意味変化については、複合的な原因が考えられる。まず、英語には「狩猟する」という意味では本来語のhuntがあったため、この2つの借用語は主として狩猟以外の一般的な意味で用いられるようになる。次に、catchは16世紀初め

には当初持っていた「追う」の意味をchaseにすっかり譲り、両者の意味の重なりはなくなった。歴史的には概ねこのような過程を経て、それぞれ今日の意味を持つようになっているわけであるが、認知意味論の観点から言えば、原義のスキーマと考えられる「(逃げるものを) 追いかけてつかまえる」という行為全体の中の、catchは後半部分を、chaseは前半部分を焦点的に表すようになり、結果的にcatchのほうは日常非常によく用いられる基本動詞になっているのである。

このような事例とは異なり、次のようなペアでは、フランス語のほうで別の語が日常的に使われるようになったため、その用法が制限されて使用頻度が少し低くなっている。

money 「お金、通貨」—monnaie 「通貨、硬貨、小銭」

日常のフランス語においては、「お金」の意味では、素材で物質を表すargentが使われて、monnaieは「小銭」の意味で用いられている。

さらに、フランス語ではほとんど用いられなくなった事例もある。

noise 「騒音」—noise 「〔古〕けんか」(成句でのみ)
quiet 「静かな、じっとしている、平穏な」
—quiet 「〔古・文〕安らかな、閑寂な」
stay 「とどまる、滞在する、ままだいる」
—ester 「〔古〕立つ、〔法〕出延する(不定詞のみ)」

いずれの場合も、英語のほうは最重要語なのに対し、元のフランス語のほうは古語になっており、stay—esterに関しては、綴りも意味もかなり異なっている。フランス語のesterはラテン語のstare 「立つ」から古フランス語でesterになったものであるが、日常生活ではもはや用いられない。それに対して、15世紀に古フランス語のesterの語幹estai-が入って現在の綴りになった英語のstayのほうは、今日もっともよく用いられる動詞の1つになっているのである。

VI 対義的faux amisの連続性

借用語と元の語の間に意味のずれが生じるのは、何も特別なことではない。それどころか、自然な言語現象であると言える。なぜなら、借用語はそもそも完全に同じ意味をもったまま採り入れられることはほとんどないし、たとえ同一の意味で流入したとしても、単

義の化学記号とは違って、自然言語の語彙は本質的に年月が経てば用法・意味が変わったり広がったりしていくものだからである。そして、借用語と元の語の意味変化が異なる仕方であるいは異なる速度で進んでいくと、時としてfaux amisが対義的になることもある。それでも、たとえ一見関連がないように思われるfaux amisであっても、実は背後に連続性があるということ強調しておきたい。次のような意味の違いが極端に大きいfaux amisの場合も例外ではない。

- formidable [[正式] 恐ろしい、手ごわい]
 —formidable 「すばらしい、ものすごい、
 [文] 恐ろしい」
 nice 「心地よい、すばらしい」
 —nice [[古] 愚直な、[法] 保証のない]

formidableについては、フランス語では遅くとも19世紀初頭までには「異常な、すごい」という意味で用いられるようになって、現在では「すばらしい、あきれた、ものすごい」という意味で日常的によく使われているが、「恐ろしい」という意味での使用は文語的になっている。一方、英語では「恐ろしい、手に負えない、恐ろしくたくさん [大きい]」という意味で使われていて、フランス語のように良い意味で用いられないようである。ここで注意すべきは、フランス語でも「恐ろしい」から「すばらしい」へ一足飛びに意味変化が起こったのではなく、「異常な、すごい」にまで使用が広がってから対極的な意味へと変化しているという事実である。これは、「普通でない」ことを表す英語のextraordinaryとフランス語のextraordinaireが悪い意味だけでなくいい意味でも使われることと合わせて考えるとわかりやすい。つまり、対極の意味変化は間を経ずに一気に起こるのではなく、中立的な意味を介して連続して起こるということである。これは別に1つの言語の特殊な現象ではなからう。

さて、フランス語のformidableは近代の文学作品では本来の意味でも用いられているが、英語のniceに関しては、本来の「愚かな」という意味はもっと以前に消えてしまっている。そこからの意味の変化は、「内気な」「気難しい」「細部にこだわる」「扱いが巧み」を経て、「魅力のある、親切な、気持ちのいい」に至ったようである。借用当初の13世紀の意味と今日の意味の違いは非常に大きい、その悪い意味から良い意味への変化は歴史的には連続している。そしてその

過程にも中立的な意味が認められる。英語のniceの極端な意味的移行の転換点は「細部にこだわる」という意味での使用のあたりだったと捉えることができる⁹⁾。今、formidableの場合は、極端な意味変化がフランス語で起こって英語では起こっていないため典型的なfaux amisになっていることをみたが、niceの場合は逆に、極端な意味変化が英語で起こってフランス語では起こらなかった。それどころか、源であるフランス語のniceのほうは、もはやほとんど魔語と化しているのである¹⁰⁾。

概念化者がことばを用いるのだから、ことばの使い方やその意味に、概念化者の対象や事態の捉え方が反映するのは当然のことである。拡張した用法は慣習化することもあるし、しないこともある。した場合は、新たな意味として辞書に登録されることになるわけである。

VII おわりに

ゲルマン語の強い影響を受けたフランス語は、もともとラテン語から遠ざかったロマンス語（ラテン語起源の言語の通称）だと言われる。一方フランス語の強い影響を受けて、フランス語およびラテン語から多くの語彙を採り入れた英語は、もっともラテン的なゲルマン系言語だと言われる。単に異なる文化や新しい技術・思想・社会制度が入っただけでこれほど大きな言語変化は起こらない。両言語の著しい変容に共通するのは、言語集団の支配と移住に伴って集団間の深い交流がしばらく続いたことである。とくにイギリスでは、上層言語が公用語になり、少なくとも数世代に渡って二重言語話者がいる時代が続いた。もちろんフランス語の使用は議会や法廷や宮廷などが中心で、一般の人々は相変わらず英語を使っていたため、結局は英語のほうが残ることになったわけであるが、英語はフランス語から非常に大きな影響を受けた。その結果、両言語の間には実に多くのfaux amisが存在することになったわけである。

それは今日、英語話者がフランス語を使う場合にも、フランス語話者が英語を用いる場合にも、用法上の誤りを引き起こしている。最後に、意味が大きく異なるfaux amisだけでなく、かなり重なっているfaux amisについても注意を喚起しておきたい。次のフランス語の文のparent以外の語に逐語的に英語を当てるので、全体の意味をとっていただきたい。なお、この文の定冠詞は特定の対象を指示する用法ではなく、カテゴリ

一としての総称を指す用法である。

Le chien est parent du loup.
the dog is of the wolf

英語から類推すれば、「犬はオオカミの祖先である」という読みになったであろう。しかし、生物学的にそのようなことはありえない。実は、フランス語のparentには、「親、祖先」だけでなく、英語にはない「親戚、類縁(の)」という意味もあるのである。したがってこの文の意味は「犬はオオカミに近い」ということになる。英語のparentは「親」を中心的な意味としてその先の大元にまで縦に拡張した意味までもっているが、フランス語のparentは同じ中心的な意味から、縦だけでなくさらに横に広がる縁者にまで拡張した意味も持っているわけである。このように、用法・意味は、1つの方向だけでなく複数の方向に広がることもあるのである。

注

- 1) フランス語の影響は語彙的側面に限られていない。英語の比較級・最上級に本来の-er、-est型だけでなくmore、most型があるのもフランス語の影響によるものであるし、ドイツ語などとは異なり、名詞の複数形がsの付加によって標示されるようになったのもフランス語の影響によるところが大きかったと考えられている。
- 2) ガリアの地は西ローマ帝国の滅亡前からたびたびゲルマン語の言語集団に侵入されたため、フランス語はその成立過程において、ゲルマン語の影響を強く受けた。たとえば、イタリア語やスペイン語やルーマニア語とは異なり、フランス語が主語を必ず明示するようになったのもゲルマン語の影響によるところが大きかったと考えられている。ちなみに、Franceという国名は、現在のフランスとドイツの大部分と北イタリアのあたりを指したラテン語のFrancia フランキア (regnum Francorum 「フランク人の国」) に由来する。
- 3) 第3の要因もある。それは、近代後期以降の英語からフランス語への語彙の流入である。その傾向はとくに20世紀半ばから顕著になり、今日新聞や雑誌でもますます英語の語彙が使われるようになってきている。なかにはparking (parkは古フランス語parcから) やinternet (inter-は古フランス語inter-、entre-から) などのようにすっかりフランス語に溶け込んでいるものも少なくない。しかしながら、語源的にフランス語とまったく関係がない、英語からの純粋な借用語はstopやweek-endなどわずかしかないし、仏和辞典には載っていないものも多いので、ここでは取り上げないことにする。なお、英語からの純粋な借用語で仏和辞典において最重要語(アステリスク2つ)として登録されている単語は、12世紀に借入された「東」「西」「南」「北」と18世紀におそらく英語から入ったとされる「赤ん坊」ぐらい

である。

east—est west—ouest south—sud
north—nord baby—bébé

- 4) 英語のhistoryのほうはラテン語からの借用語である。
- 5) becauseとpendingは『ジーニアス英和辞典』では最重要語とされていない。なお、主に商業用語として使われるperはラテン語のperからの借用で、日常語では古英語の前置詞anに由来するaがよく用いられる。cf. \$50,000 { a year / per annum }。
- 6) 英語とフランス語の基本語を比較するにあたって、『プログレッシブ英和辞典』と『クラウン仏和辞典』を用いた。『プログレッシブ英和辞典』では、中学基本語約1,100語にアステリスクが2つ、高校基本語約4,800語に1つ付けられている。一方、『クラウン仏和辞典』では、もっとも重要な約400語に大きな活字でアステリスクが2つ、次に重要な約800語に並みの活字でアステリスクがおなじく2つ、そして残りの基本語約3,800語にはアステリスクが1つ付けられている。つまり、活字の大きさにかかわらずアステリスクが2つ付いたものを合わせると約1,200になり、英語約1,100とほぼ対応している。なお、統一を図って、『プログレッシブ英和辞典』ではアルファベットと国名・地名などの固有名詞を除き、『クラウン仏和辞典』では他動詞・自動詞・代名動詞の区別があっても1単語とみなして統計をとった。
- 7) フランス語のphotoやtéléphoneなども、先に英語に入り、のちに現在の意味でフランス語で使われるようになっていたので、意味的には、英語からの借用語とみなすこともできよう。
- 8) それを借用した英語のplume「(大きくて派手な) 羽、羽飾り」のほうには「ペン」の意味はない。
- 9) 三輪(1995)は、英語のniceが外来語でありながら、1音節語でかつ良い意味をもっている本来語(mild、kind、rightなど)に共通する[ai]という二重母音を含んでいることを指摘し、難解な外来語から日常基本語への移行には言語内的原因もあったことを考慮に入れるべきだという趣旨の主張を行っている。
- 10) niceは9万語収録の『ロワイヤル仏和中辞典』にも収録されていない。

参考文献

- BLAKE, Norman
1992 *The Cambridge History of the English Language*,
VOLUME II 1066-1476, Cambridge University Press.
- BRUNOT, Ferdinand
1966 *Histoire de la Langue Française des Origines à Nos
Jours*, I, LIBRAIRIE ARMAND COLIN.
- GUIRAUD, Pierre
1994 *Dictionnaire des Etymologies Obscures*, Éditions
Payot & Rivages.
- IMBS, Paul
1971-1994 *Trésor de la Langue Française : Dictionnaire de
la Langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, Paris :
Éditions du Centre national de la recherche scientifique.
- MURRAY, J. A. H., BRADLEY, Henry, CRAIGIE, W. A. and

- ONIONS, C. T.
1989 *The Oxford English Dictionary*. 12 vols. 2nd ed. by John Simpson and Edmond Weiner, 20 vols, Oxford: Clarendon Press.
- ONIONS, C. T.
1966 *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford: Oxford University Press.
- PUFFER, Christiane Dalton
1996 *The French Influence on Middle English Morphology: A Corpus-Based study of Derivation*, Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- ROBERT, Paul
2001 *Le Grand Robert de la Langue Française: du Dictionnaire Alphabétique et Analogique de la Langue Française*, 2^e éd., dirigée par Alain Rey, Paris: Dictionnaires le Robert.
- ROEY, Van Jacqies, GRANGER, Sylviane and SWALLOW, Helen
1998 *Dictionnaire des Faux Amis Français-Anglais et Anglais-Français/Dictionary of French False Friends French-English and English-French*, French & European Pubns.
- WALTER, Henriette & WALTER, Gérard
1998 *Dictionnaire des Mots d'Origine étrangère*, LAROUSSE.
- WILLIAM, J.M.
1975 *Origins of the English Language*, The Free Press, New York.
- 天羽 均
2006 『クラウン仏和辞典』第6版、三省堂。
- ヴァルトブルク、フォン・ヴァルター
1984 『フランス語の進化と構造』、白水社。
- 大槻 博、大槻 きょう子
2007 『英語史概説』、燃焼社。
- 小野 茂、小野 恭子
1999 『文化史的にみた英語史』、開文社出版。
- 小野 捷
1980 『英語史概説』、成美堂。
- 北村 達三
2004 『英語を学ぶ人のための英語史』、桐原書店。
- クレパン、アンドレ
1997 『英語史』改定新版、白水社。
- 小島 義郎
2007 『英語語義語源辞典』、三省堂。
- 小西 友七
1994 『ジーニアス英和辞典』改訂版、大修館書店。
- 小林 永二
1994 『英語彙の史的考察—フランス借用語を中心に』、泉屋書店。
- コムリー、バーナード
1999 『世界言語文化図鑑』、東洋書林。
- 小山 次郎
2006 『ラテン語と英語—より深く英語を理解するために』、文芸社。
- 田村 毅
2006 『ロワイヤル仏和中辞典』第2版、旺文社。
- 寺澤 芳雄
1997 『英語語源辞典』、研究社。
- 寺澤 芳雄
2004 『ことばの苑—英語の語源をたずねて』、研究社。
- 橋本 功
2006 『英語史入門』、慶應義塾大学出版会。
- ホームズ、U.T.、シュッツ、A. H.
1980 『フランス語の歴史』、大修館書店。
- 三輪 伸春
1995 『英語の語彙史—借用語を中心に』、南雲堂。
- 山田 秀男
1994 『フランス語史』、駿河台出版社。
- リカード、ピーター
1995 『フランス語史を学ぶ人のために』、世界思想社。